

投稿

大西高司さんとの2年間

大島 修（岡山県立水島工業高校）

去る1月9日、38歳という若さで逝った大西高司さん（名古屋市科学館）に対し、私が共に過ごした在りし日の姿を記すことで追悼としたいと思います。大西さんと過ごしたのは、今世紀になったばかりの2年間でした。彼が理学部卒業から、恒星の高分散分光を学ぶために大阪教育大学の修士課程に入るまでの3年間のうちの後の2年間です。たったの2年間ではありますが、彼が才能を発揮し、夢を見事に実現するための2年間だったと言えると思います。

大西さんとの出会いは、勤務校でサーバー管理の仕事を手伝ってもらうために公募した「情報教育アドバイザー」という名の当時緊急雇用対策として設けられた仕事に、彼が応募してくれたことに始まります。当時の勤務校は、岡山天体物理観測所の麓にある鴨方高校で、それは普通科から改編した岡山県下では初めての総合学科でした。また、同時に岡山県が独自に高速光ファイバー網を県下に張り巡らす岡山情報ハイウェイ構想の実現に力を入れていた頃で、学校教育の場でもその実践的活用が期待されていた時期でした。新しい学校の姿を求める総合学科で、岡山情報ハイウェイ構想を結びつけた実践ができれば、面白そうなことができると思っていました。しかしそれには、一人前に授業を持つ教員だけではとてもこなされる事量ではなく、補助してくれる人材がどうしても必要でした。そこで雇用期間は半年で再任用なしという条件でしたが、WindowsNTサーバーだけでなくLinuxサーバーの管理もできる人材を求めことにしたのでした。

このような有能な人材を得るには、地元だ

けに目を向けていても無理で、全国でオープンに探した方が、志のある人が見つかる可能性が高いことは、美星天文台での求人経験からわかっていたので、天教メーリングリストで呼びかけました。すると、山口県立博物館の松尾厚さんから電話があり、山口大の卒業生で、博物館の観望会などを手伝ってくれていた大西さんという人がいると、紹介してくれました。早速会って面接しました。それまで大西さんは兵庫県庁でサーバー管理の仕事をアルバイトとして1年間行っていたとのことで、扱っていたファイルサーバーはWindowsNTで、Linuxは未経験だが勉強しながらぜひやってみたくと意欲的でした。大学での卒論についても話を聞くと、物理学科の指導教官は天文学のことは良く知らなかったもので、自分でチャンドラーセカール「星の構造」（長田純一訳、講談社）を読んで、計算プログラムを書いて、恒星の内部構造を計算したとのことでした。思わず片山敏彦さんのこと（「チャンドラーセカール『星の構造』と我が人生」『天文教育』Vol.22 No.5 P.28参照）を思い出しながら、こういう人が欲しかったんだと私は喜びました。さらに聞けば、彼は加古川東高校の出身だということで、私の大学時代に大変世話になった地学研究室の先輩であるI先生が加古川東にいるが知っているかと尋ねると、彼は何と地学部の部長をしていたので、顧問のI先生には大変世話になったという話になったからさあ大変。その場で同高校へ電話し、「今、大西さんが採用面接に来ている」云々、と長電話になってしまいました。もちろんその場で採用を決めました。

着任後、大西さんはバリバリと仕事をこな

し、NT サーバーはもとより、教えたばかりの Linux による Web サーバーやメール、メーリングリストのサーバーの管理もすぐにこなすようになり、日常的なサーバー管理はすべて安心して任せることができました。知らないことでも自分で調べて解決するので、彼に対する私の満足度はすこぶる高いものでした。当時、鴨方高校では県下で始めて教員一人に1台のノート PC を支給し、出欠管理などだけでなく、授業にもそれを活用する取り組みを始めていましたが、それに慣れない教員にも彼は親切に対応し、大変評判がよく、採用した私も嬉しかったのを覚えています。しかし、当時の「情報教育アドバイザー」という職はあくまで緊急雇用対策のためであり、半年と言う雇用期間は動かし難く、同一人物の再雇用も無理であったため、やむなく半年後に彼は加古川の実家へ帰りました。(何年か後に通年雇用も OK になりましたが、このような有能な人物を半年毎に見つけてくるのは本当に大変でした。)

その年の秋は、天文学会が姫路で開かれる予定で、その世話役の黒田さんから、普通はジュニアセッションはポスター発表だけの秋季年会ではあるが、ぜひ口頭発表も開きたいので、鴨方高校からも発表をして欲しいと依頼されました。たまたまその年は、顧問をしていた科学部に好奇心旺盛な生徒たちが集まっていたので、生徒にその旨話をすると、ぜひ自分たちも研究発表をしたいということになりました。放課後の活動には大西さんにも指導者の一人として参加してもらうことを頼むと、二つ返事で OK してくれました。その研究テーマは、いろいろと考えた末に、まだ日本の高校生が行ったことがなさそうな「太陽の5分振動の検出」に挑戦することにしました。(そのあたりの事情は「天体観測の教科書 太陽観測編」(誠文堂新光社)に少し詳しく書きましたのでここでは省略します)

昼間に太陽を観測できる夏休みになるまでは、放課後に集まって、ゼミのような勉強会を開き、名著と言われたギブソンの原題”Quiet Sun”邦題「現代の太陽像」(桜井邦朋訳、講談社)やケネス・R・ラングの「太陽」(渡辺・桜井訳、シュプリンガー)の、主に5分振動を扱っているあたりを皆で一緒に読んでいきました。この時に印象的だったのが大西さんで、どの生徒よりも熱心に興味関心を示して勉強会に参加していました。もちろん物理学科を卒業した分、高校生よりも理解度は良くて当たり前なのですが、勉強意欲の点でも部員以上だったと思います。そして、まるで高校生のように部員に混ざって活動していました。図1は、シーロスタットと屈折望遠鏡を組み合わせて太陽円盤の中心部でのドップラーグラムを冷却 CCD カメラで(部員よりも熱心に)観測している大西さんの姿です。(前向きの画像がなくて済みません)そして、校内での観測はもとより岡山体物理観測所の65cm 太陽クーデ望遠鏡を使った観測にも積極的に参加してくれました。



図1 太陽の5分振動の観測に協力する大西高司さん(後姿)

12cm シーロスタット+8cm 屈折望遠鏡+H フィルター+CCD カメラで太陽円盤中心部を撮像中。鴨方高校地学教室にて。2001年7月。

当時の鴨方高校は、何か面白そうなことをしていると、直接関係なくても好奇心旺盛な生徒たちが寄ってくるという雰囲気のある学校でした。そのような好奇心旺盛で積極的に活動する二人の女子生徒がいて、それなら大学へ進学して勉強をしてみてもどうかと勧める話をしていました。そこへ加わった大西さんも、大学で専門的に学ぶことの素晴らしさを話したあと、自分の夢を力強く語りました。「僕ももうすぐ大学院へ行って研究者になるんだ。そして、すばる望遠鏡を使って観測をするからね。見ておいて欲しい」と。渡り廊下でそう語った大西さんの姿が今も目に浮かびます。秋の天文学会でのジュニアセッションでは、雇用期間が終わり加古川の自宅に帰っていた大西さんも駆けつけてくれ、(出来過ぎ、教員の研究ではないのかという疑問も出たようですが、それはさておき) 好評のうちに発表は無事終了しました。

普通なら、これで大西さんとの縁は切れるはずですが、しかし、さらにその半年後の新年度には、学校の基幹をなす教務管理システムの5年ぶりのリース更新が予定されていました。これは、複雑極まる総合学科の教務関係の仕事を補助するのに不可欠なシステムで、大幅なシステムアップの必要がありました。それを担当するソフトハウスは、本社が東京にあり、鴨方高校の案件に対応するための「岡山営業所」常駐要員が必要でした。ここぞとばかりにそのソフトハウスに大西さんを有能な人材として紹介し、次年度春からの1年間の雇用契約で採用が決定しました。半年のブランクの後、大西さんは鴨方駅近くのアパートを再び確保し、今度はソフトハウス社員として鴨方高校へ他の開発プログラマーと共に常駐勤務が始まりました。大西さん以外のプログラマーは春から秋の納期までの期間で引き上げましたが、その後の半年間は大西さん

だけが常駐し、アフターケアと未完成部分の開発を一人で担当しました。このWebシステムはLinuxサーバーに、オープンソースのデータベースとPHP言語を組み合わせて実現するもので、当時はそのソフトハウスでも未経験の分野でしたが、大西さんは独力で勉強しながら半年で見事に完成させました。(その経験を買って、四国で開かれた2003年度の天文教育研究会の参加者受付は、Web上で行い自動処理を行なうようにしましたが、そのシステムは大教大へ進学していた大西さんをお願いして作ってもらったものです)

彼を「情報教育アドバイザー」として採用した年の1月から、実は毎週土曜日の午後に美星天文台で恒星スペクトルのゼミを始めていました。もともと突発天体の分光観測で有名な藤井貢さんから、「低分散分光の観測はしているけれど、恒星の元素組成まで求めるような勉強をしたい」という相談を受けて、美星天文台に相談してゼミの会場を確保してもらい、美星天文台からもゼミに参加したいという綾仁さん、川端哲也さん、五百蔵さんも加わって、David F. Grayの「恒星大気の観測と解析」(英文)というテキストを読むものでした。その話を4月に着任したばかりの大西さんにすると、これも二つ返事で、すぐにその週末から参加しました。テキスト1冊を読み終わるのに2年ほどかかりましたが、ちょうど大西さんが鴨方にいた期間と重なり、彼にとっては進路を決める勉強会になったのではないかと思います。実はゼミを始めるにあたって、使うテキストは何が良いかを相談したお一人が定金さんで(もう一人は故竹内峯さんで、その前年に共著論文を書いていた時期からこのテキストを勉強することを勧められていた)、大西さんには、大学院へ行くならこの分野ではすばるのHDS分光器をバリバリ使って観測をしている定金さんが大教大

にいたので、実家からでも通えるし、ぴったりでないかと勧めたところ、彼はそう決めてしまいました。そして入試に合格し、それは実現しました。進学した大西さんは定金さんの共同研究者としてすばるを用いて恒星の高分散分光観測を実施しました。定金さんは、「もっと研究室に居てもらって力を発揮して欲しいのに、もう就職が決まってしまった。本当は喜ぶべきことなんだが、、」と修士1年と半ばで名古屋市立科学館の学芸員採用が決まった大西さんを残念がったり喜んだりしていた。

このように大西さんとの2年間は、普通の仕事だけをこなすだけの関係とは異なり、科学教育やお互いの天文学の理解を深める濃密な勉強の機会でもあり、彼の進路を決める重要な機会でもあったのだと思います。そのようなことがあったから、わざわざ彼の結婚式の披露宴に、指導教官であった定金さんとともに私も「かつての職場の上司」として呼んでくれたのだと思っています。(この披露宴には後日談があります。披露宴の夜に、私はある系外惑星のトランジット観測を美星天文台で予定していたために、披露宴では、隣で定金さんが美味そうに飲むアルコールを私だけが飲まず我慢していました。新幹線で帰着した新倉敷の駅からそのまま車で天文台に駆け

つけ観測に成功しました。それも単に観測に成功しただけでなく、1ミリ等級下という国内ではまだ誰も達成したことがない最高の測光精度を実現した記念すべき観測でもありました。その日は、名古屋で披露宴の行われた昼間から雲ひとつない素晴らしい快晴でした。後で知ったことですが、すでにその頃には大西さんには脳腫瘍がある事がわかっており、その上で二人で相談して結婚を決めたのだそうです。そうは知らない私は披露宴に脳天気に参加していました.....)

大西さんは、本当に気持ちの良い青年で、いつも笑顔を絶やさず、ここに書いた2年間は情報管理の仕事に、科学部の指導に、休日でのスペクトルの勉強に、全てに渡って一緒に活動することができました。まだまだこれから力を発揮するはずであった大西さんの夭逝は本当に残念です。生きていた彼の姿をここに再現することで、私達の心の中で生き続けてくれると思います。ご冥福をお祈りいたします。

大島 修

* * * * *